

31 疾病史に見る時代区分について

小曾戸 明子

Owsei Temkin (1902-) 『The Falling Sickness』

(和田豊治による邦訳『てんかんの歴史』)の第一版の序(一九四五年)は、日付はなく、冒頭なげくように結論めいた内容が記されている。「てんかんの歴史は熟していない。その研究はおそらく成算も疑わしい仕事であろう。てんかんの概念の幅については異議が少なくなく、また疾患の性状も明確にされていない。一方では「真性」てんかんと同じような症候群を呈する器質疾患が多いし、他方ではてんかんと重症ヒステリーとの間に明確な線をひくことは、不可能ではないとしても困難である。てんかん研究の視点が広がるにつれて、この疾患はますます同定されにくくなり、種々の病因から由来する多くの「複数のてんかん」を含みながら、けいれん状態という領域に埋没してしまうのである。」と。この埋没についてテム

キンは、てんかんの歴史の場合は、結核の歴史のような方法では書けない、と差異を強調して、「結核の場合、われわれは疾患の性状に関する決定的で、十分に確かめられた知識をもっていた。」と記すが、結核の歴史に成算は確かなのであろうか。

富士川游は『日本疾病史』(明治四十四年)の序論で、「余が疾病史は、……等諸家の先例に倣わず。疾病を列挙するに明かに順序を立てず。その各個の疾病につきて、名義、原因、証候、及び療法等の歴史を叙述し、流行病にありては、疫史の一章を設けて、流行の歴史を詳かに記したり。」と西洋医家の著述と異なる所以をのべている。目次に掲げられているのは、疫病、痘瘡、水痘、麻疹、風疹、虎列刺、流行性感冒、腸窒扶斯、赤痢、の九つである。「世界に類例のない本」「中国をのぞけば、これほど古くから記録ののこっている「先進国」はない。」と絶賛している松田道雄は、疾病史という名がついているのに、実際には急性伝染病であることについても、他の疾病の歴史がありえないのは、「症状の区別はあったが、非伝染性の疾病で今日独立の疾病とされているも

のが、医者に認識されるようになったのは、ほとんど十九世紀以後のことである。」からであると解説でのべている。

日本文学通史を書くことを志してきた小西甚一の通史に対する考え方は、「事実の集積を通して文藝現象の在り方を問うためには、どうしても「一人の眼」を必要とする。事実の探索には大勢の分業・協同がきわめて有効だけれども、それを処理する史観は寄り合い所帯であることが許されない。」として、年代記ふうの時代区分をそのまま借用した在来の日本文学史の時代区分を学術的な根拠を欠いた便宜的なものとしてしりぞけ、「文藝自身のなかに存るもので文藝の展開を秩序づける」ために独自の時代区分を立てる必要を説くことからはじまる、として、新たに時代区分を立てるための指標を模索し、先例に拠りつつ表現の完成をめざす「雅」と、先例のない未開拓の表現にいどむ「俗」との二つの表現理念にゆきついたようだ。文藝ということばに疾病と置きかえてみたくなるのは、文藝と精神医学の近しさからであろうか。

テムキンは、そのてんかんの歴史を記す際の時代区分の最後の六番目に、十九世紀 ジャクソン時代 を置いている。これも形をかえた「一人の眼」の到達と言えるかもしれない。

(海上療養所)